

そのうちに、灌漑用のパイプやトラクターも購入されるようになります。

私はこういった当時の資料を読んで、最初これはイスラエル社会の発展の過程だと解釈していました。でもよく考えると、このプロセスにはもう一つの面があることが見えてきました。つまり、イスラエルの独立でアラブ人が逃げたり追い出されたりして空き家が増え、そこにユダヤ人が入居したから補償金が必要なくなったのです。だから補償金を社会のインフラ整備にまわすことができるようになったのです。そして、灌漑設備の購入に示されるのは、イスラエルの空間的な拡大、もしくは膨張です。それまで半砂漠であったような場所に水が引かれ、農業が生まれたということです。つまりそこに以前暮らしていて、乾いた土地でも育つオリーブなどを採取していた人々はいないわけです。

こういう風に見ると、ヒトラーのユダヤ人迫害に端を発し、それを償うために行われた補償が、イスラエルのインフラを作り、

生まれたばかりの国家が短期間で中東の大国になった一因となったことがわかります。そして同時にこれは今日まで続くパレスチナ人とイスラエル人の間の物質的な不平等を生んだ原因の一つでもあります。

私は、自分の研究を通じて、現在のパレスチナ問題に対する自分なりの読み方ができるようになったと思っています。問題の根本はイスラエルとパレスチナの間の物質的格差です。この格差が歴史的にいかに生まれたのかを知ることなしには、問題の全体像を見るのは難しいのではないかと思います。ですから私は、歴史を学ぶというのは、現在について知ることには他ならないと思っています。過去はすべて現在につながっていますから、現在について知りたければ過去についても学ばなければなりません。未来について考えたければ、やはり過去からつながる現在を見る必要があります。これはすべての人にかかわる問題ではないでしょうか。そういう意味でも皆さんにはぜひ歴史を勉強して欲しいと思っています。

砂漠とオアシス

後 藤 健

以前から歴史が好きだった私は、大学でも歴史を勉強したいと考え、第一文学部に入学した。当初は特に目標があるわけでもなく、考古学にもそれほど興味はなかったが、たまたまエジプトを旅行する機会があり、そこで目にした数々の遺跡・遺物や日本とは全く違った環境・人々の習慣などに大きな感銘を受けた。これがきっかけとなって考古学に対する関心が高まり、進級時に考古学専修を選択し、無事に合格することができた。

しかし専修に進級しても最初是不真面目な学生で、授業以外では研究室に顔をだすこともほとんどなかった。二年生の夏になると考古学実習の授業で初めて発掘調査に参加することになった。当時は岩手県下閉伊郡田野畑村の館石野Ⅰ遺跡で発掘実習を行っていた。最初は何も分からなかったものの、土を掘ると住居のあとや土器などが

出てくるのが面白く、実習が終わった後も、大学での整理作業に参加した。作業が終わったあとにただで酒を飲ませてもらえることが楽しかったというもあるが、整理作業を通じて、発掘してからそれを公表するまでのプロセスを学び、考古学の方法を理解することができた。

つまみ食いのような形でいろいろと手をだしていたが、もともとは中国への関心が高かったので、卒論でも中国の考古学を選び、大学院に進学して中国の先史時代の研究を自分の専門として選択した。しかし、当時の中国では外国隊の調査は中国との共同という形で解禁になったばかりの頃だったので、現地での調査が困難な状況だった。そんな時に当時の助手の方からシリアでの農耕集落の遺跡調査に参加をしないかと声をかけていただき、卒論では農耕に関するテーマを扱ったこともあり、参加させていただくことになった。

シリアでは、初めての海外での調査ということで、困難なことも多かった。遺跡は

ユーフラテス川のすぐ傍の小さな農村の中にあり、電話もなく夜は明かりもない。草木もほとんどない砂漠の中で、夏のため気候が厳しく、日本とはまったく違った状況だった。アラビア語もほとんど分からず最初は帰りたくて仕方がなかったが、しばらくすると慣れてきて、言葉も必要な単語は憶えて何とか二ヶ月間の調査を終えることができた。

その翌年、早稲田大学の東洋史の教授で、シルクロード研究者であった長澤和俊先生が中国の新疆ウイグル自治区で行っていた調査に参加する機会を得た。中国といえども新疆ウイグル自治区は中国の一番西にあり、大部分は砂漠である。調査を行っていたトルファンは天山山脈から流れる雪解け水による砂漠の中の大きなオアシスで、昔から交通の要所として栄えた場所である。最初はシリアとあまり変わらない環境に愕然としたが、シリアでの経験があったおかげですぐに慣れることができた。そこでは、車師前国の都、麴氏高昌国の副都であった

交河故城に暮らしていた人々の墓地である溝西墓地で調査を行った。

調査が終わりに近づいた頃、一つの墓から黄金製品や中国製の鏡、銅銭、海貝などが出土した。これらは現地産ではなく、東西南北のいろいろな地域からもたらされたことが明らかで、文献には残っていない地域交流の実態を目の当たりにすることができた。土の中から出てくる過去の人々の残したモノが新たな歴史の復原の材料となるが、これこそ考古学の醍醐味の一つであると感じる瞬間だった。もともとは中国でも沿海部地域に興味を持っていたので、シルクロードの歴史はあまり興味がなかったのだが、この調査に参加したことで新しい興味がわき、いろいろ調べていくうちに、これも面白いと思うようになった。

「視野を広く持て」と日頃から良く言われるのだが、興味を持つきっかけは些細なことからも始まる。振り返ってみると、海外調査に行った場所は砂漠やその中のオアシスばかりだが、普段生活している場所と

は人々の暮らしも町の様子もかなり違うため、普段なら気にもとめないようなことでも興味を持つようになる。実際に現地に行くときよく市場などを見学するが、そこで売っているもの一つとっても面白い発見があったり、どうしてもそうになっているのだろうと考えたりする。過去の人間を研究の対象にするのが考古学であるから、そんなことも全く無関係ではないのである。

現在は21世紀COEプログラムのアジア地域文化エンハンシング研究センターのもとで、新疆の調査に参加している。この調査では天山山脈を越えた北側の地域の遺跡を訪れたが、それまで七年間毎年新疆に来ていても気が付かなかったことを、いろいろと発見した。「百聞は一見に如かず」という言葉の通りだが、それも自分でアンテナを張っていないければ気づかないまま見落としてしまうものである。歴史にかぎらず、何を勉強するにしても、好奇心を持って物事に接することが重要であるから、ぜひとも幅広く関心をもって考える材料を増やし

ていただきたいと思う。

○平成十五年度卒業論文要旨

〈日本史学専修〉

パリ講和会議・人種差別撤廃問題をめぐる国内動向

佐川 享平

はじめに

一九一九年、第一次世界大戦の戦後処理のため開催されたパリ講和会議において、日本全権は人種差別の撤廃を提案し、否決された。この人種差別撤廃問題は、日本が国際会議の場で積極的な、国益をこえた公正な提案を行った特殊な事例として注目される。先行研究についてもそのような観点に基づき、主に外交史・国際法学の立場から研究がなされてきた。しかし一方で、この提案が国内においてどのような意識に支えられていたのかにつ

いては、必ずしも明らかではない。

本論の目的は、人種差別撤廃問題が日本国内でどのようにとりあげられ、認識されたのか、また、それが講和会議の展開の中でどのように変化したのかを検証し、当時の日本人の人種観や対外認識を明らかにするとともに、人種差別撤廃案の否決がそうした認識にどのような影響を及ぼしたのかを考察することにある。これはまた、今日における日本人の人種・民族差別問題への姿勢を考察する上でも資するところがあると考ええる。

分析の対象時期は第一次世界大戦終結間近の一九一八年一〇月から講和会議が終了する一九一九年六月までとし、その上で、

- ①新聞・雑誌に表れた主張の推移
 - ②支援団体・運動の動向
 - ③政界の動き
 - ④当時の諸問題との関連
- という四つの項目を設定し、それぞれの展開と推移につき検討した。

国内動向を計る史料として、新聞（『東